



沢田 秀穂

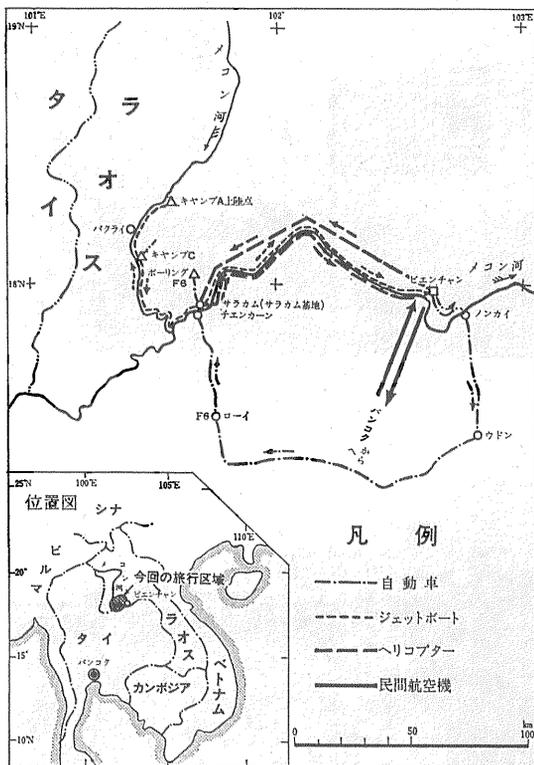
本篇には物価 食事 時刻などについて煩瑣にわたるような記述があるが これはあまり現地に親しくない読方にも なるべく身近かに感じていただきたい かつは 今後現地に行かれるような方々のご参考までにと 思っておいて 記したもので その点ご諒承いただきたい

L博士が「いつも君は Miserable geologist in office といっているし 他にも用が大分あるから 一度国連ラオス鉱物資源調査隊の調査現場までいってきなさい」とかねていっておられたが 幸い各関係者の都合をつけてもらって 去る2月3日から14日まで2週間近くラオスのビエンチャンと メコン河に近い二つの調査地を訪れる機会をえた。 バンコクの国連事務局からジャングル

の中までできたのは私が最初とのことで 調査隊長はたいへん喜んでくれた。 実際に調査の仕事を担当しているのは 国連の下うけであるフランスの B. R. G. M. (地質鉱産調査局) のチームで 隊長はオランダ人(といってもフランス語はペラペラだが)の地質技師 隊員はすべてフランス人で 地質技師2名 地球物理技師1名 ボーリング係2名である。 その他はすべてラオス人 ただしビエンチャン事務所の秘書と調査基地のシェフとはベトナム人で よくしらべれば他にもベトナム人あたりがもっているかもしれない。 ラオスの鉱山局側からはこの調査計画のラオス側主任H技師が私と一緒に入山した。 私は国連側計画主任L博士の代理というわけ。 このほか旅行の一部に国連メコン事務局の鉱産顧問W博士(英国海外地質調査所派遣)が夫人をつれて加わった。

1969年2月3日 月曜日 W夫妻は陸路自分の車で国境をこえ ビエンチャンへ行くというので 私は一人空路をとる。 11時45分エカフェ事務局をでて 飛行機にのりこんだのは13時45分。 今度は日の都合でタイ国内航空。 14時5分バンコクドムアン空港離陸。 窓の枠のところにゴキブリの小さなこどもがちよろちよろしている。

15時20分ケスタの上空を通過。 このケスタのすぐ下から川がながれだして湿地を作っているのがみえる。 この地形の現場を後に車で通過することができたがその時の事はまたあとに記す。 ビエンチャンにつくまで何回かひどい下痢をする。 バンコクではこのような原因不明の下痢に年何回かおそわれるが 別に薬をのまないでも2~3時間から2日間位で治る。 しかし場合によってはしぶん閉口させられる。 ビエンチャンへつのがまちどおしい。 15時30分 やつとビエンチャン空港着。 涼しい。 正直に空港事務を終り 外へでてタクシーをとろうとすると わきからぬっと大男のBRGM隊長が太い手をだしてきた。 彼は今日はまだ中部ラオスのフランス人経営の錫鉱山へ行っているはずなので



筆者の旅行地略図

全く予期しなかったことだ。 どうしたんだときくと 鉱山への道が途中で2・3か所パテトラオ軍に破壊され 行けなかったんだという。 彼には気の毒だが 今の私にとってはありがたい。 彼の運転するランドローバーでホテルへ送ってくれる。 今日には仏教の休日の由なるほど街の車の数が少ない。 オフィスは大体皆休みということらしい。 ホテルにつき 受付のすぐわきのパーで早速隊長と30分間打合せ。 話している内に 1965年はじめてここへきた時泊った日本人経営の宿がやっているはずだというので彼がつれていってくれる。 当時健在だった経営者のY氏は シンガポール育ちの日本人二世で日本語を話さない人だったが 1年程前マニラで客死 その後Y夫人が経営に当たっている由。 夫人はちょうど不在で 隊長はさらに夫人のも一つ経営する本屋につれていってくれ やっと夫人にあり。 向うはもちろんすぐには私が誰かはわからず 私も夫人が4年の間に大分年をとられているので一寸人ちがいかと思った程だが 話をしている内に両方とも前の時の感じに戻ってきた。 この本屋は今ビエンチャンで英語の本屋としては最も大きいものとのこと(フランス語の本屋は別にある)。 ご主人が4年前 タイム・ライフなどの代理店をやっておられたものを夫人がさらにひろげられた店。

店の中には日本航空の旗がたっていて日本人の青年が事務をとっている。 この旅行社の仕事もY夫人の経営という。 宿の方は夫人方が寝泊りするだけで客は入れていないというので断念。 4年前はベトナムのダラートで女学校に行っておられた令嬢は今フランスのソルボンヌ大学に科学を学び 令息は英国に留学中という。 とてもお忙しい様子なのですぐおいとまし 隊長に送られて17時20分ホテルに帰る。 つかれた。 ふろに入ってベットにひっくり返る。 このふろは 前信に記した様にパリ製製の電気温水器でわかした湯を入れるのだが どんなに早くから電気を入れておいても一回にバスタブの1/4位しかお湯ができない。 太陽熱を利用したらほとんど設備費だけでふんだんに湯がつかえるのに高い電気を使って 前回と同じことを考える。 日本の太陽熱温水器をもっと積極的にこうした太陽エネルギーの豊富な所にうりこんだらどうだろう。 ホテル アパート 一般家庭 工場 火力発電所など ずいぶん潜在需要はあるんじゃないだろうか その方がはるばるヨーロッパから電気温水器を買ってきて これまたはるばる買ってきた重油をたいておこした電気を使って 浴槽半分をも満たせない程の湯を作るよりはるかにまさっているだろうなどと 白い天井をながめながら考える。

18時50分から19時30分までホテルの食堂で夕食。 他

にはまだ客はいない。 大前菜とオニオンスープをとる。 それぞれ500 600キップ 計1,100キップにサービス料などついて 1,400キップになる所は日本のホテルに似ている。 現地貨キップの市価は現在500キップが1米ドル。 これは日本をふくめた数か国の財政的援助で作画的にこの率に支えられているのだそうだ。 ホテルもこの率である。 ただし国家予算などをキップから米ドルに換算する時は240キップ1ドルとしている。

食後 街を散歩する。 日本婦人が数人店をのぞきこんでいる。 ビエンチャンは在タイ邦人がビザを更新するのによくくる所でおそらく この婦人方もそういった用向きでみえたのだろう。 インド人の布地屋。 Mainland China 産と思われる陶磁器 彫刻などの店に入ると 店番の若いシナ人の男がすつとよってくる。 こうした精緻をきわめたものはあまり肌に合わないので早々に退散。 20時30分就床 まだ腹具合がおかしい。

2月4日 火曜日

7時おきる。 さむい。 ゆうべから電気を通じておいた温水器のおかげで温湯に入る。 ただし例によってゆぶね一杯にはならない。 朝食はホテルの食堂で パイヤーが70キップ それにフランスパン バター ママレード コーヒー ミルクで600キップとなる。 ビエンチャンのバンコクにまさる一つの点は フランスパンの美味なものがどこでも安く買えることだ。 香ばしくかりかりとしたこのパンはまったくうまいと思う。

8時30分 BRGM 隊長の車で彼の事務所(兼住宅)へ行き 12時まで仕事の打合せ 検討。 これはすべてニューヨークの国連事務局本部からの各種の問合せ事項についてのもの。 それがほとんど同じ様な事項をちがった部局からばらばらにたずねてきている。 一つの会社に各省のちがった部局から各種の報告をてんでんばらばらに要求してくるといふ某国の状態に似ているかもしれない。 問題な点はこの調査計画の始まった時から終始これに当たっていた責任者が調査隊側にも事務局側にもいないこと そして交代した責任者の間の事務引つぎは必ずしも十分でなくたとえば 事務局側の新旧計画主任の事務引つぎはわずか一時間の会合にすぎず しかもそのあとすぐ旧主任はバンコクを離れている。 もう一つの難点はいろいろの必要な機械器具の注文主が 現地調査隊自身 バンコクの事務局 ニューヨークの事務局本部と三者が別々に注文し 受託側も一社ではなく ヨーロッパ各国 カナダ 米国 オーストラリア 日本 タイ ラオスの色々な会社であること。 従って注文品がまちがったり 発注 発送のおくれ 会計の不明などが



国際休戦監視委員会のヘリコプター

生じがちである。これはやはり発注者 受注者ともすべて一本にまとめるのが理想的であろう。後日 BRGM のボーリング主任は ニューカレドニアで作業した時 すべて機械器具は BRGM 当局がまとめていたため 3年の間一度もこの種のトラブルはなかったと述べている。

12時隊長にホテルまで送られ 例によって二人でパーに入ってレモン水 160 キップをのんでいるとW博士夫妻が到着。一緒に食事にでる。ホテルのわきのフランス語を話す白人経営の食堂で昼食。店の中には入らずおおいの下のテラスにすわる。夫人はスパゲティ 500 キップ W博士はビフテキ 700 キップ 私は腎臓のステーキ 600 キップ。フランスパンはただである。W博士は前回のくさい鹿肉の話をもちだして 私の注文品が口にあらかしたらと心配してくれたが 臭いもなく タレもおいしく結構いけた。おとで調査地のキャンプでフランス人たちと食事を何日か共にしたが 2時間もかかってしゃべりながら食事をするのに この英国人夫妻の食事は簡素かつ短時間である。もっともジャングルの中で たべることの他には何の楽しみもない人々と 楽しみが一杯の新婚の夫妻とでは事情が全くちがうかもしれない。ホテルに帰ってベットにしばらくひっくり返る。

15時V隊長に伴われてラオス鉱山局を訪問。今朝作業した事項についてラオス側の項を作ってくれる様 説明 依頼。エカフェ事務局の鉱業年鑑担当者からたのまれてきた1967年度のラオスの鉱業地質調査事業についての情報を 明朝9時局長をたずねてしゃべってもらうことにする。前回10月訪問の時はいたK地質技師は ルーマニアへ同政府の奨学金で18か月の予定で再度留学に行ったという。局長も何を勉強しにいったのかしらないとのこと。折角野外で実際働けるラオス政府唯一の地質技師であったのに 何か月もラオスにおらず 外国へ行ってしまおうとはと嘆く外人技師もいる。この国の悩みの一つは 外国に留学してきた優秀な若い人々が

帰国しても法外にわるい政府の給与と現在の政治状態とにあいそをつかして また外国に去り そこで職をえて再び戻ってこないことだそうで その点10年程前の私のいた中東某国の事情に酷似している。日本でも台湾でも頭脳の流出は騒がれているが ある程度のレベル以上の 人々の数が絶対的に少ない。こうした国々の事情はさらに深刻なもの様である。化学実験室も今回はガランとして 日本の平和部隊隊員のW氏一人がぼつねんとしている。ラオス人の助手たち 皆中部ラオスの錫鉱山とわれわれの調査隊の野外作業に出払ってしまった由。今日は折角の日英両国寄贈の機械・器具もあくびをしている。バンコクの家にあつた東芝の小型扇風器の一つを 換気のあまりよくない局の化学実験室に思っ ぽらさげてきたのを局長にどうぞと進呈する。特に謝意は表されない。これはアジアの国々の多くに共通にみられる現象である。ちなみに ラオス政府の執務時間は朝7時半から12時まで 午後は2時から5時まで ただし土 日は休みである。

16時30分この仕事を終り 一寸ホテルに戻った後 18時まで街を散歩。この街はいよいよ小香港的になってきた感じ。必要品が比較的少なく布類 スーツケース類位のもの。ラジオ テープレコーダー カメラなどはここではまだ必要品というよりはゼイタク品であろう。布地はインド人 その他は華僑が売っている。裾に金糸の美しいふちとりのあるスカートのラオス婦人方は大方お客。これと日本人 米人がカモの様に見える。二人のミニスカートのアメリカ娘が入ってくると店員がへい ジョーとか何とかよんでいる。おい沢田君てなもんだらうからとでもお客様への言葉とは思われないが 両方とも何とも思っていない様である。彫刻品を売っている店に入ってみる。仏像はすべて模造品。木で寿老人のような像を刻んだもの 羽やワラの様なものを使い額に入れたこまかい細工は Mainland China か香港のもの。蝶の羽を使ったコップ敷きなどのセットは台湾からか。ちなみにタイは Mainland China とは全く外交関係がなく 同国の製品も入れることが許されていないが ここには Mainland China の大使館もあり その産物は街中にあふれている。リンゴ モモ ナツメなど果物の干したものはすべて同国産。人々はさむいのか長袖のものをきてジャンパーなどがたくさん売りだされている。水泳仲間のT嬢から頼まれたデオールの香水をさがすがみつからない。V隊長夫人もさがして下さるというが。

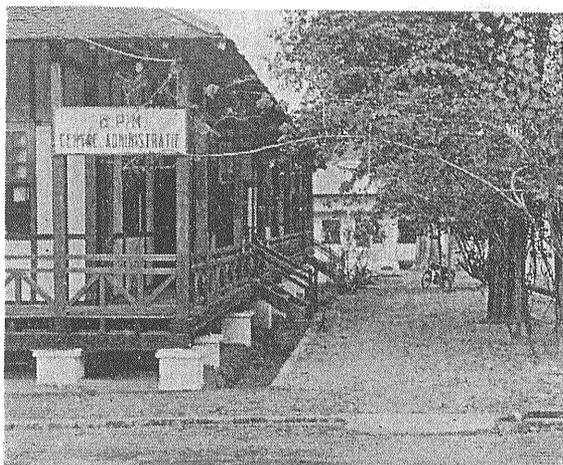
19時30分から隊長 同夫人に夕食に招かれる。来客は国連駐在員事務所次長 この人は単身 レバノン人の

同所所員夫妻 イタリア人の地理局付 ILO 派遣航空写真専門家夫妻 それに私。次長は英国人だがドイツ人の様な苗字をもった中年の東洋的な感じの顔の人。非常に物静かである。この人に限らず大体私の接した限りでは英人や北欧の人々は話をしている相手にだけ聞える程度の声で話す。アメリカ人はそのあたり20m四方位にいる人々皆に聞える様な声で話す人が多い。

イタリア人の奥さんがこれに近く ややハスキーな声のイタリア語で テーブルにつく前からびっくりする様な大きな声で話す。この夫人はイタリア語オンリーでフランス語も英語も話さない。ご主人はイタリア語はもちろんフランス語もペラで英語も結構話す。レバノン人の夫人はスイス人でこれはお国柄独仏伊三か国はもちろん英語も巧みな上アラビア語も話す由。従ってイタリア夫人のお相手はこのレバノン人の奥様とご主人のレバノン人。イタリアのご主人は私にフランス語を話しますかときいて英語だけとの返事に英語をつかってくれる。席の話はかくてイタリア語 フランス語 それに英語。ラオスの様な旧フランス植民地へくるとフランス語が公用語の様なものでフランス語もできると何かにつけて便利である。私の様に時々話のかけらがわかる程度では役に立たない。

料理は隊長のコックのベトナム人のおばあさんが作ったもので 隊長夫人も手を少しかしたそうである。食物にはほとんど興味のない私でもうまいと思うのだからずい分おいしらしい。いずれもフランス風。ワインをのみつつフランスパンをかじりつつ話がテーブルの上にもり上る感じ。時々イタリア夫人がテーブルがひっくり返りそうな声をだす。ベトナム人のおばあさんは日本人のおばあさんにそっくりだがそれが巧みなフランス語で話すのをきくと奇異の感にうたれる。優秀なコックで隊長夫人はパリへつれてかえることも考えている由。私が1955年にバンコクで一泊下宿した所の家主の姉さんがやはりベトナム人の女中としてヨーロッパへ行っていたと話していたが こうしたことはフランスあたりよくあることらしい。そのベトナム人のおばあさんをみていると コックであって女中でないとい所からか態度がそう polite とは感ぜられない。これは後日調査地のベースキャンプで使っていた男のベトナム人コックにも同じ様な態度がみられたが。おいしいご馳走と楽しい話にいつのまにやらおそくなって 時計をみると11時40分 ホテルへ戻ってベットに入ったのは真夜中をすぎていた。

国連駐在員事務所を訪れる。 前回は未着任だった新所長 K 氏にあい W 博士から今次計画終了(野外調査は1969年7月頃終了の予定)後の新しい計画について説明の後 K 氏が見所をのべられる。氏の考えでは国連特別基金は訓練研修をも行なうことができ 政治事情の不安定な現在のラオスにあっては 同基金による鉱産地質関係の事業も研修訓練を主とすべきで 野外調査については 非常時には安全に国連所属の人員を保護する任にある同氏としては 今積極的にこれをすべきでないといされる。氏の考えはこれまで世界各地で20年からこの種事業にたずさわってきた同氏の経験からするもので 非常な自信をもって説かれ その態度はきわめて真摯なものがあり またその考えは妥当と思われたが 従来国連特別基金は研修訓練を援助目的としないとされていて その考えに基づいて次回計画の同基金への申請書類は作成されているため 今になってこの申請については 留保条件がついた形となり 原案作成主任のW博士は大いに困惑の態である。話は随分と熱の入ったものとなりふと時計をみるに鉱山局長との約束の9時はすでに30分近くこえている。9時35分ともかくK氏の線で作業をすすめ同氏も大いに努力してくれるという結論に達し漸く話を終って鉱山局にかけつける。時計は9時40分。局長におくれたおわびをいって きのうのつづき。ラオス側計画主任の作ってくれた資料をうけとってしらべる。残った分は何か私がビエンチャンを離れるまでに用意の程願う。局長に1967年以降の地質鉱産事情をしゃべってもらってノートし 用意しておいてくれた生産表などありがたくうけとる。この様に約束どおりこっちの願いごとをやっついて頂けるということは 私の経験からいうとアジアではなかなかのことが多く 文字どおり有難い。11時10分仕事を終わり W博士と共に今度はラオス地理局へ向かう。11時20分から12時30



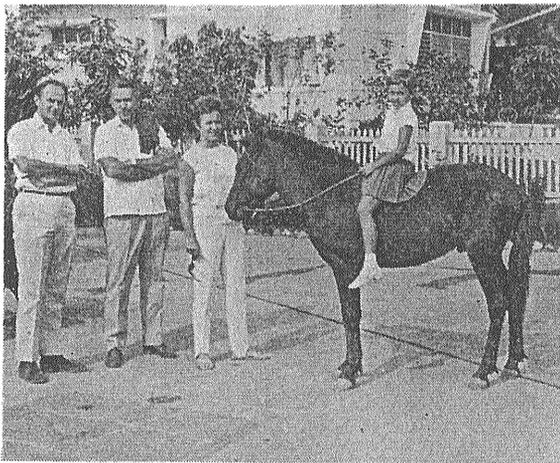
ビエンチャン フランス軍事顧問団の一部

2月5日 水曜日

6時30分起床。 7時50分W博士と共にホテルをでて

分まで 同局長 同局付 ILO 派遣のゆうべあったイタリア人航空写真専門家と次回調査計画などについて同局側の援助を願い 色々と技術上の説明 うち合わせなど。同局の測量 製図 印刷 航空写真の利用 訓練などの分野における能力は この国としてはややアンバランスの感がある程大きく 鉱山局側としては十分地理局の協力をえてこれら能力を活用すべきものと考えられるが地理局側も非常に協力的なのはうれしく思われる。一つの国が経済的 政治的に困難な状態にあればある程こういった国内にある諸機関の協力は必須のものであり貴重なものといえよう。ひるがすぎたので地理局長の令息がお父さんを誘いにくる。夫人がフランス人だけあって白人としかみえない。礼をのべて同局を辞する。ホテルに戻りその食堂で昼食。ランチ1,200 キップ。パンはただだが パターは別に100キップ これに200キップのサービス料で1,500キップとなる。へやに戻りベットにしばらくひっくり返る。バンコクよりはかなり涼しいがやはりひるひなかはだるい。

14時30分から16時まで国連 BRGM 調査隊の事務所では将来の計画について隊長 鉱産顧問と討論 そのあと隊長の長女ビビヤンの馬にのせてもらう。くつわはビニールのヒモの手製。アプミもクラもなく毛布をかりてその上にまたがる。日本古来の馬に似たポニーでおとなしい。調査隊は現地ではもっぱら四輪駆動車一てんばりだが 所によってはこうした馬も活用できるのではないかと思う。とも角車のいたみ様はひどく 新品のランドローバーもトヨタトラックも2シーズン(調査シーズンは11月頃から翌年5月頃まで)で 6台6,000米ドルもかけて大修理をしなければならぬ始末。牛車や馬をうまく組合わしたらかなり経費も節約できそうな気がする。話はそれだがこの小馬でその辺を一周り。



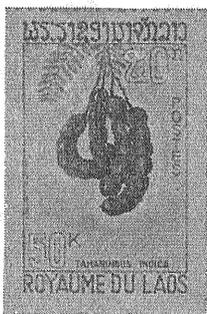
隊長宅事務所 馬上ビビアン嬢・隊長夫妻・W博士(ビエンチャンにて)

ビビヤンがついてきていろいろ話をしてくれる。彼女はパパやママとはもちろんフランス語 オランダ語で話すわけだが 学校では英語だからこれも立派につかう。9才位までにちゃんと教えればどの子も母国語として二つの言語は話せる様になるときいたが ビビヤンは7才で3か国語がマザータンクとして話せる一つの例である。日本ではこれまでは幸か不幸か国内にいる限り日本語だけですんでいた訳だが これからもし国外国内で外国人とやっぺいこうとするならば 生れた時から9つ位までの間に家では日本語 学校では英国といった風な生活をつくりだすことが必要の様に思われる。こんな考は日本ではまことに突飛にしか思えないだろうが 外へでてみればごくあたり前とうけとれるし 事実としてもいくらでもみられることで むしろ日本の方が例外に近いといえる。ともかくこういう無邪気な童女と話をするのはまことにたのしい。

16時15分鉱山局に立よってもらい 日本の平和部隊のW氏にあい今夕の食事を共にすることとする。も一人のO氏は帰国が近くその準備に忙しい由で局にはみえてない。

18時40分約束どおりW O両氏がオートバイにのってホテルにみえる。この街でも 今や二輪車はフランスその他の欧州品を圧して日本製が出てきている。タクシーでY夫人経営の料理店へ行く。このタクシーは乗合いで同方向へ行く人々がのり合わせて行くシステム。われわれの場合は同一個所へゆくのだから 簡単で300キップときまる。ただしこれは一車を300キップでやとったのではなくて 3人の乗客が各100キップの料金でその料理店までのり合わせたという訳である。

この料理店は 4年前とあまり変わっていない様にみえる。もっとも照明がくらいのであまりよくはわからない。現地の若い男たちがききあきあいて玉つきをやっている部屋 そこだけ明るい。メコン河に面したひるまはながめのよいテラスも月がないのでまっくらである。それでも何人かの客が座っている。W O両氏のおすすめでいわゆる日本間をかりる。板の間にうすべりをしき 松井善根氏?の書の軸がかかっている。隅に動いていないエヤコン。荒涼たる部屋だがルームチャージ500キップ(1米ドル)。スキャキ3人前2,250キップ フィリピンのビール2本700キップ 熱いお茶300キップ パナナ300キップ サービス料300キップ 計4,350キップ 約9米ドル。現地人のボーイがはこんでくる。材料はまあまあ。帰りに帰宅していたY夫人に挨拶 同店のバンでホテルまで送って下さる 21時。Y夫人は忙しすぎてこの料理店には手が十分には



ラオスの切手

まわりかねているという感じ。

2月6日 木曜日

7時過ぎる。 8時ホテルで朝食 プレーンオムレツ 200キップ これは何とお粗末で小さい。 よほど小さな卵とみえる。 パパイヤ トースト バター ママレード 水。 計560キップ これはサービス料80キップがついて640キップとなる。 この朝食の勘定は日によって変わり かきつけをかく少女の気分によってきまる様な所があり 一度これを指摘した所彼女大いにむくれたが 結局ボーイが私の正しいことを彼女に申出てやっと訂正を得たことがある。 こうした国営ホテルの食堂につとめるとなれば 彼女らには大変な誇りがあるのもっともだが その誇りはそれに相当する能力と責任感とによって必ずしもうらづけされていないとみえる。

朝のうち露天の大市場のとなりにある中央郵便局へ行

って美しい切手を買う。 ここは先日パテトラオ兵と政府側の兵士らしいものとの間に うちあいのあったすぐそばで まだその部分は通行止めである。 私自身は切手を集める趣味はないが 日本のこういうものすきな人に喜んで頂けるかと思って求める訳である。 印刷所がわかるかと 完全なシートをいくつか求めたが 印刷所の名はのっていない。 こんな平和な国ラオスの切手にも戦う兵士の像のいくつかある。 今度の大戦を契機として独立した国々の切手に戦闘の図ののるのはもっともだと思うが かつての日本の様に 武力そのものが価値あるもの そうしたものを通じて国に貢献することが最も望ましいことという気持を 国民の若い世代にうえつける様な結果にならなければよいが という気がする。 その点日本の今の切手は模範的によい例じゃないかしら。 局員の切手の扱いはあまり丁寧ではない。 うらの糊の部分に水がついても平気である。 切手係は

婦人が多く 計算器はこの仕事には使っていない。

宿へ帰ってきょうは一日 BRGM の1957年から60年までの間の調査報告書をしらべ表をつくり 重要と思われる図を略写する。英摘訳作成は 鉱産顧問の担当である。

11時すぎホテルのバーでV隊長から隊員のX氏夫妻を紹介される。同氏は地球物理—地質技師。BRGMの局員ではなく 他社から派遣されている由。このBRGM 隊では地質技師が地化学探査もやり X氏の様に地球物理技師がまた地質技師でもある。このような条件はイギリスの海外地質調査所の隊にも またタイにきていた米国地質調査所所員にも一般にみられる所であり西独の連邦地質調査所の連中もこの点をはっきりして地球物理家と自分でいう人も 物理探査は地質調査の一段にすぎないと明確にいい 地質技師が物理探査や地化学探査を自分自身では道具として使わないことが 多い国はむしろ例外的のようにみえる。

12時30分から13時40分までW博士夫妻とこの前の料理店ローズマリーで昼食。多少埃っぽいが通りに面したテラスでとる。オニオンチーズスープ 500 キップ フランスパン120キップ バター50キップ 計670キップ。パンはかごに山もりにあり バターは一つ一つの錫箔で包んだ小さなものでホテルでは100キップとる。

19時より BRGM のレポートしらべでいささかつかれた。散歩 夕食 買物に街にでる。ラーメン2杯で200キップは日本と同じ位か。ただし焼豚の代りに小さく刻んだ鶏肉が入っている。そう大してうまきはない。バンコクでは1杯2パーツ約36円と約半値である。バンコクの事務所の人々に Mainland China の干し果物教函 水泳仲間のお嬢さん方にオーデコロン。香水

はけたちがいい高くとても手がでない。化粧品はピエンチャンの方がバンコクよりはるかに安いと信ぜられているが真偽の程はつまびらかでない。20時15分ホテルに帰ってやすむ。

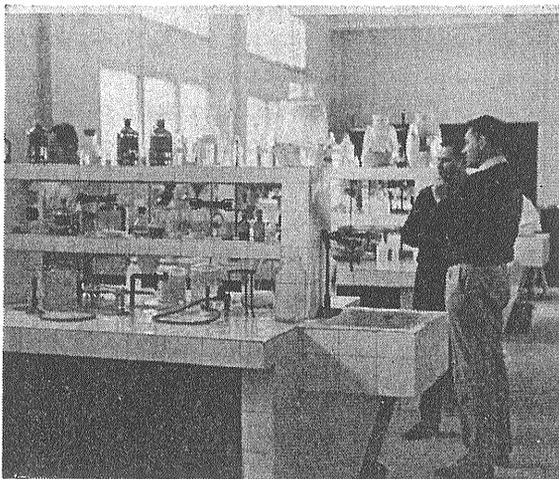
2月7日 金曜日

7時50分から8時15分までホテルの食堂で朝食。けさはパイヤ 半熟卵2つ フランスパン パター ママレード 540キップ。このホテルでは半熟卵をたのむとコーヒー茶碗にわっていれてきてくれる時とそうでない時とある。1664年私の毎朝食事をとったマニラのある食堂ではいつもわって同じような厚いコーヒー茶碗に入れてきてくれたことを思いだす。

8時30分鉱産顧問とともにV隊長を訪れ 明日からの旅行の打合わせをする。8時45分隊長とともにラオスのメコン国内委員会の委員長を訪れるが 国内出張中の由で不在。

9時30分から10時までピエンチャン医学校の化学実験室を訪問。二人のフランス人化学技師が中核となって勤務して 今度のわれわれの調査の地化学探査の試料は一部ここで分析してもらっている。機械器具はちょっとみた限りでは フランス製のものがほとんどのよう。部屋は非常にきれいに保たれている。隊長は鉱山局の化学実験室の連中をここへつれてきて 化学分析はどういう状況下でやるべきものかを示したと得意そう。しかるべき外人が常時勤務して仕事を生耳っているということが重要な点のように思われる。またフランス人はフランス語が公用語のようなこの国では植民地時代とあまり変らず影響力があり この学校で仕事を運ぶ上にも大いに有利なのであろう。

この医学校は Ecole Royale de Medecine といひ Section Medecine, Section Pharmacie 及び Section Dentaire の3つに分かれている。前述の化学実験室は Section Pharmacie に層し 二人の仏人化学者はこの Section の主任教授と教授ということで 主任のB氏は中年の紳士 も一人のR氏はまだ20代かと思われる若い人である。この薬学科の開始は1966年 現在学生は一年生が男4女2の計6名 2年生男5女4計9名 3年生男1女4計5名 4年生はなし。学年は10月に始り6月に終わり この期間内に試験を行なう。フランスにあつては初級学校5年間 中級学校7年間の後 バカロレアの試験をとれば無試験で大学に入りうるが初級5年 中級4年の教育をうけた場合は B. E. P. C. の資格をとり さらに 競争試験を通過して大学に入ることになる。当 Ecole Royale de Medecine はこの大学に相当するものとして扱われているというのがフランス



ピエンチャン医学校の実験室

人の先生方の説明。

この化学実験室は普通の化学実験室 エアコンのしてある計測実験室及び生化学実験室の三つがある。後の二室の間は空気は互に流通するようになっており また生化学の部屋にはよく整理された薬品収納棚がある。若い男女が数名いて実験助手かと思ったが 何れも学生の由 補助員としてはラオス人の中老の男子が1人労働者とよばれているだけである。医学校を辞してV隊長を同氏宅に送る。途中郊外に近い金色の塔の寺を通してくれる。この寺はこの町では名所の由。何となくネパールのカトマンズあたりと似た印象をうける。ここでもお寺は学校の機能をもっていることを知る。

隊長の言では他の隊員たちはいざという時の心配から何れも住宅をフランスの軍事顧問団の占める広大な一郭の近くに求めているが 自分はむしろ国連の駐在員事務所近くに家と事務所を決めたのだという。ちなみにこのフランス軍事顧問団の占める一郭は郊外の飛行場近くにあって 病院やプール テニスコートなど各種設備のとのっていることはアフガニスタンの首都カブルの英国大使館を思わせる。

10時半鉱山局に行き バンコクからもってきた書類の調製につき念を入れてのみ 明朝の出発について打ち合わせをし 11時15分ホテル帰着。このあと昼食時を除いて17時10分まで昨日のつづきで BRGM の報告書をしらべ必要と思われる図を略写する。トレーシングペーパーはW博士が街で2mほど買ってきてくれたもの。

12時30分からW博士夫妻ときょうもローズマリーで昼食。夫人の希望で今度は室内でとる。屋外の埃とハイに閉口したのかもしれない。しかし彼女は若いこともあってか 地質家の妻にふさわしくなかなか勇敢で我々の行く所ならどこへでもついてきそうである。足が長くてミニスカートがよく似合い 物の言い方 歩き方などいかにも英国人的。顔だけみてもなかなかわか

らないが こうした挙動をみると米国人との間にはつきり区別がつく。料理は例によって実質的なオニオンスープそれにフランスパン バターで675キップ。スープはチーズとパンがどっさり入っていて これだけでも十分という感じ。食事のあと シナ人の店によって Mainland China 製のほしくだもの三箱600キップを買いたす。

17時10分から18時15分まで V隊長W博士と同行して先にのべた空港近くのフランス軍事顧問団の病院にゆき調査地のキャンプでわり竹をはった浴室の床にふみこんで足を切り 入院中のS地質技師を見舞う。30才位の小柄なフランス人で元気にしゃべる。病室は小さいが一隅にプラスチックのカーテンでかこったトイレがある。エアコンはない。報告書のかきかけ。この暑い所でこんなことで病院に入っているのはあまり楽しくないだろうと 戦時中アメーバー赤痢をこじらしてボルネオはバンジェルマシンの病院に入っていた時のことを思いだし同情する。湿潤熱帯で冷房のない病室にねているというのは全く楽なことではない。空港への大通りにでる病院からの道はアスファルトでおおわれているが その両側はスラムのような現地人の部落 フランス軍事顧問団の占める一部とは全く別の世界である。

18時20分大通りにでた所で車から下してもらい 一人隊長に教わった朝鮮料理の店に行く。タカラ食堂という名である。なかなかきれいな日本語をはなす中年の婦人 その他中年の男子 娘と思われる人などが一隅にいる。以前バンコクの朝鮮料理屋にいた人がやっている由。キムチ 前菜 ワンタンスープ ヤキニク 白飯で1,250キップ。おいしい。19時店をでてホテルまで歩いて帰る。途中から停電になったらしく自家発電の銀行は明るい 19時30分ホテルについてみるとまっくら。19時40分電気がきてやれやれ。(つづく)

(筆者は元所員 現在バンコクECAFÉ事務局)

新刊紹介

Introduction to Mineralogy

Carl W. Correns 著 Springer-Verlag

今回出版されたこの本は1949年に出版されたものを完全に改訂したものである。本書を書くにあたって著者の意図したものは いわゆる鉱物学の教科書を書くことではなく 結晶・鉱物・岩石の成因に関する基礎的な知識の入門書をあらわすことであった。

従って通常の教科書とは異なり 結晶学・岩石学・付表の3部に分かれ 結晶数学・結晶化学・結晶物理・結晶成長・物理化学の基礎・火成岩の成因・風化作用・堆積岩・変成作用・地球化学的考察の諸章からなっている。

付表は結晶学の表・鉱物分類表・岩石分類表からなっており 岩石については化学組成と鉱物組成 鉱物については重要な性質が記載されている。巻尾には重要な文献の表がある。記述には1967年頃までのデータが引用され 個々の鉱物の説明はないが 代表的な phase diagram はそれぞれ関連のある記述の部分に紹介してある。この様に従来の物を static に扱ったものとは異なり dynamic に扱ってある非常にユニークな鉱物学の入門書である。現在の地球科学の基本的な考え方と将来の方向の概要を知る上に地学関係の専門家や学生にとっては恰好の書であろう。(S)

定価：6,320円

購入は：最寄の外国書販売店でどうぞ